

第28回ミツバチ科学 研究会に参加して

小林 一恵

最近の蜂病対策に関わる法制度の改正等、正しい知識を得たいと思っていた折、今年の第28回ミツバチ科学研究会では、主任の中村助教授から残留農薬のポジティブリスト制導入等についての解説をしていただけたということで、期待して参加した。

中村先生の話は、十分にわかりやすく、注意すべきことがらも書きとめることができた。解決されていないことも多いが、結局は薬剤に頼りすぎず、消毒、清潔、豊かな蜂群作り等、計画的な防除を心がけ、管理することが肝要であることはわかった。

当日は、これとも関連してレンゴー（株）亀井清氏の講演「ワサビ成分のチョーク病に対する効果」が、薬剤の使用をできる限り減らすというこれからの養蜂に的確に添った内容であった。蜂病対策についての多くの不安を持っているであろう参加者に、天然由来の成分利用という新しい視点と、ていねいな説明で、安心と希望とを与えてくれたように思えた。

講演後、講師の亀井氏には直接何点かの質問をさせていただいた。なおかつ、後日、サンプルと資料まで送っていただくというサプライズ



日本養蜂はちみつ協会青年部による署名運動

まで手にした。このように身近に、即、交流を得られる点でも、この研究会の存在を実感させられた。

吉田教授の特別講演「セイヨウミツバチ雄蜂の集合場所のその後」は、玉川大学近辺における15年前と現在のミツバチの配偶行動を、貴重な当時のスライドと現況のスライドを対比させながら説明下さるというものであった。わかりやすく、興味深く聴講できる内容で、あっという間に時間が過ぎてしまった。

今回の研究会では、総合討論で、養蜂家の立場からいくつかの報告があった。いずれも養蜂家にとって身近な問題で、現場の声を聞けるといふ点は新鮮だったが、なかなか解決の方向性は見えないし、参加者からの声も残念ながら少ないように思えた。ニセアカシア問題では日本養蜂はちみつ協会の関係者による署名活動もされていて、例年の研究会とはちがう雰囲気もあったが、今年の研究会には、「養蜂」という色がよく出て、養蜂家が勉強する会という感じが強かった。

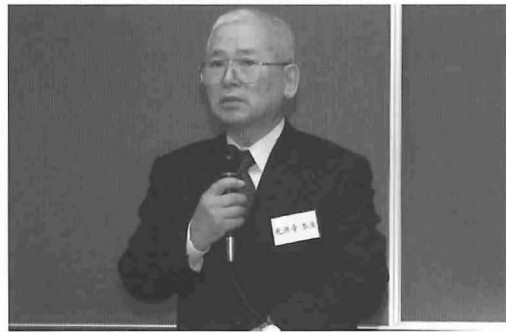
思えば、十年前の晩秋、近所の柿の木で分蜂群（逃去群）を見つけて、ミツバチのことを何



研究発表および一般講演で講演する安藤君、小野教授、亀井氏（左から）



ニホンミツバチの特別講演をする吉田教授



蜜源樹ニセアカシア保護を訴える光源寺氏



岩手県で発生した農薬害の報告をする佐藤氏

も知らぬまま、育ててみようかなという好奇心で飼い始め、今日に至っている。飼い始めて間もない頃、当時の家畜保健衛生所所長に「素人が蜂を育てるなら、玉川大学で研究会があるから勉強するといい」といわれ、「ミツバチ科学」の購読を始めた。それからは、素敵な昆虫であるミツバチとともに多くの蜂友を得て、自然を尊重し、それと共生していく生き方、おいしい地元産の蜜、花や樹木を慈しむ心、天気予報を毎日きちんと見ることなど、それまでの自分が一変する生活となった。

現在はセイヨウミツバチを15群、ニホンミツバチを2群のささやかなミツバチ愛好家で



「アルタコ」問題での今後の展開を報告する高橋氏はあるけれど、これからも「ミツバチ科学」を読み、研究会にも参加し続けたい。ミツバチを飼いながら、安心、安全な日本の食、自然がより美しく豊かな地域作りに、自分が何ができるか、今何から手がけられるかを、毎日の生活の中で考え、学び、実践していきたい。

大好きなミツバチにとっての、よりよい環境が、人間にとっての住みよい環境だと思わずにはいられない。そうした環境作りも講演の中に加えていただき、これからは私たちが勉強する機会として、この研究会が続いていくことを願いたい。

(〒370-0815 高崎市柳川町136 高崎養蜂研究所)



例年同様に満席となった会場



懇親会にも80名以上の参加者があった